

王は宮殿に座って海岸を眺めていました。そして1人の貧しい男がやってくるのを見ました。彼は顔を洗い、体を洗い、なんでもいいので食べるものを求め、家に帰って妻と食べようとしていました。王はこの男を見ると大臣に言いました。「いいか。私はあの貧乏人を裕福にしてやりたい。この王の力では彼を裕福にしてやることはできないか。」大臣は頭を振りしました。「言ってみろ。私の全ての財産で彼を裕福はしてやれないか。よし。」その貧乏人が呼ばれました。こっちに来いと呼ばれました。部屋はお金でいっぱい部屋でした。「好きなだけ持って出るがよい。」「なんと。」貧乏人は言いました。「今日はなんといい日だ。」彼は巻いていた布を取り、それを置いて上手に包みました。そしてそれを抱えしました。海岸に戻って行き彼は家に向かいました。彼が歩いていると大きな波が現われ、彼は押されてしまいました。中には大きなサメがいてサメがお金の包みを飲み込んでしまいました。家に着くと彼は妻に言いました。「今日は王にこういうことをしてもらった。でも、水が押しよせ、サメが私を押しつけその包みを持って行ってしまった。わかったかい。」「夫よ、私たちは餓死してしまうよ。王がお金をあなたにくれるっていうのかい。」翌朝、彼は出かけて行きました。王のところへ行きました。王は彼を再びみました。「ん？やつはどうしたというのだ。彼を呼ぶのだ。」彼は呼ばれました。彼を呼びました。王は金が入った袋を取り彼に渡しました。彼は言いました。「海には戻らないぞ。家に帰る時にソコ・ムホゴや他の場所を通して食べ物を買おう。市場も通ってあらゆるものを買って、家に帰ったら食べるのだ。バニアニのところの通りを通して米や粉、他にもたくさんのもを買おう。そしてお金の包みはそこにおいておこう。お金は全然減らないしまだまだある。ああ、荷物を運ぶことができない。ポーターと荷車を呼んでこよう。彼は荷車を呼んで戻ってきました。「どの店だったかわからない。この店だったかな。店の中にお金の袋を置いていったんじゃないか。」彼は、3軒、4軒の店を歩いて回りました。最後にはポーター達がどなりました。「お前はおかしいんじゃないのか。物を買うお金はあるのか。私たちはお前さんの荷物を運ぶのかい。」彼は言いました。「妻よ、今日はこういうことがあった。」「夫よ、今日は何も食べていないよ。」3日目の朝彼はまたあの場所へ行きました。大臣は王に言いました。「(あなたが面倒をみている)あの男がまた来ました。一昨日から何も食べていないようです。」「え？呼んでこい。」彼は呼ばれました。呼ばれました。彼は壺にいっぱいの金を入れてもらいました。王は彼に渡しました。「今日はあっちの方を言って家に着くまでどこにも寄らない。まずは妻にこの壺を見せてそれから。」彼が家に着くと妻はいませんでした。妻は近所に行っていました。男は縄編みのベッドのどこまでくると壺を枕にし、妻が戻ってくるまでと眠ってしまいました。さて、隣人が火種をもらいにやってきました。「なんと。あの壺はあいてしまっていて、中には金が入っているようだ。」「なんとまあ。」隣人は枕を探しに行き、男の頭をそっと持ち上げました。3日も何も食わず疲れきってぐっすり寝ていました。男をそっと持ち上げると枕を置き、壺を持ってでました。「おや、なんで寝ているの。」「ああ、妻よ。私が持ってきた壺をどっかにやったのかい。」「夫よ、ついにおかしくなったんじゃないのかい。今日は3日目、そしてお金の夢を見たと言っているよ。金でいっぱいの壺だって。そんなものないよ。夫よ、まったく。もし作り話をしているんだったら食べようじゃないか。でも、明日は日雇いの仕事でも探してやってきておくれ。」彼はもう一度王のところへ行くといいました。彼はもういちど王のところへ行きました。到着すると大臣が王のところへ行きました。「例の男です。まだ彼を裕福になさるつもりですか。」「なんと。彼を呼ぶのだ。まず食べ物を用意して食べさせるのだ、そして私に会わせるように。」彼が食べ終わると余映え増した。彼はルピーを手にとりました(祖先たちは

ルピーの話をするときにルピーを使っていました。)王は2ルピーだけを取りました。彼に渡しました。男は言いました。「今日はこれだけだ。私は買い物をし、妻に食べてもらおう。私はもうここ王のところで食べ終えた。」店に行くとき茶葉を少しだけ買いました。そしてパンなどを買い家へと向かって行きました。すると人が彼を呼ぶのが聞こえました。「ちょっと、ご主人。ちょっとご主人。」誰が呼んでいるかはわかりませんでした。「一体どうしたんだい。一昨日からあなたの荷物が置かれたままだよ。お金をここに置いたままだよ。「今日はこれまたどうということだ。」「この人はここにやってきてあそこへポーターを呼びに行ったのだ。」「そうだ。でも店がわからなくなったのだ。」「私はあなたが忘れてしまったと思っていたよ。これがお金の袋でこれはあなたの物だ。ポーターを呼んできたらどうだ。」男は言いました。「行かない。あなたがポーター達を呼んでくれないかい。」店主が大きな声で呼びポーター達がやってきて全ての荷物を積みました。男はポーター達を引き連れ家まで行きました。小さな小屋に対したくさんの物で入りきれないくらいですがなんとか中に入れました。「妻よ、見たかい。お前は私が嘘をついていると言ったが、これらが見えるかい。」すると妻は近所の人達を呼びました。「みんな来て手伝っておくれ、神からの恵みだよ。」彼女は人々を呼びました。「さて、夫よ、何かふるまいのおかずを買わないと。」彼はお金をとると市場へ行きました。市場では人々が行きかい魚を焼いており、巨大な魚が串焼きにされ人々が四方を担いでいました。男は言いました。「今日はこの魚こそが私の通りのパーティーにふさわしいものとなる。人々に私はお金を得たと知るだろう。みんなに食べてもらおう。みんなが知るようになる。」魚を担いでいた人々が彼の家まで担いできました。「ナイフを持ってきて。さばこう。」彼らが魚をさばくと中に男が初日に手にしたお金の入った布と袋が入っていました。彼は立ちあがりました。「妻よ。みたかい。王が私にくれたって言わなかったかい。」「ああ、許してちょうだい。私は信じられなかった。なぜならじっさいに見なかったから。」さて、あの壺を取って行った隣人がそれを見ました。「ああ、バニアニのところの荷物が出てきた。魚の腹からお金が出てきた。私のところにあるものは盗むべきなのだろうか。いいや。」そして彼は裏口から出て行き壺を持ってきました。男のあの壺を彼に持ってきました。「どういうことかという、あの日私があなたの家に来た時あなたは寝ていた。そしてあなたが壺の上に寝ているのを見た。だから、私が保管しておこうと思ったのだ。」男は喜びました。彼は仲間と過ごし、家を建て、幸せな生活を送りました。さて、あの大臣は王に言いました。「あなたがしたことは冒瀆です。あなたは同じ人間である人を裕福にすることはできません。彼が使える範囲で与えるべきです。あなたは彼を裕福にさせるといいました。あなたは一体誰のおつもりですか。神はまだ彼を裕福にしたいと思っていなければ、神が決めるまでは彼は裕福にはならないのです。」これは老人たちの知恵のお話で、神がなすことは神が決めていることだという知識と信念を私たちに教えるものです。